

38
光村 小国 317

垣内松三著

教育部
資料室

たんぽぽ

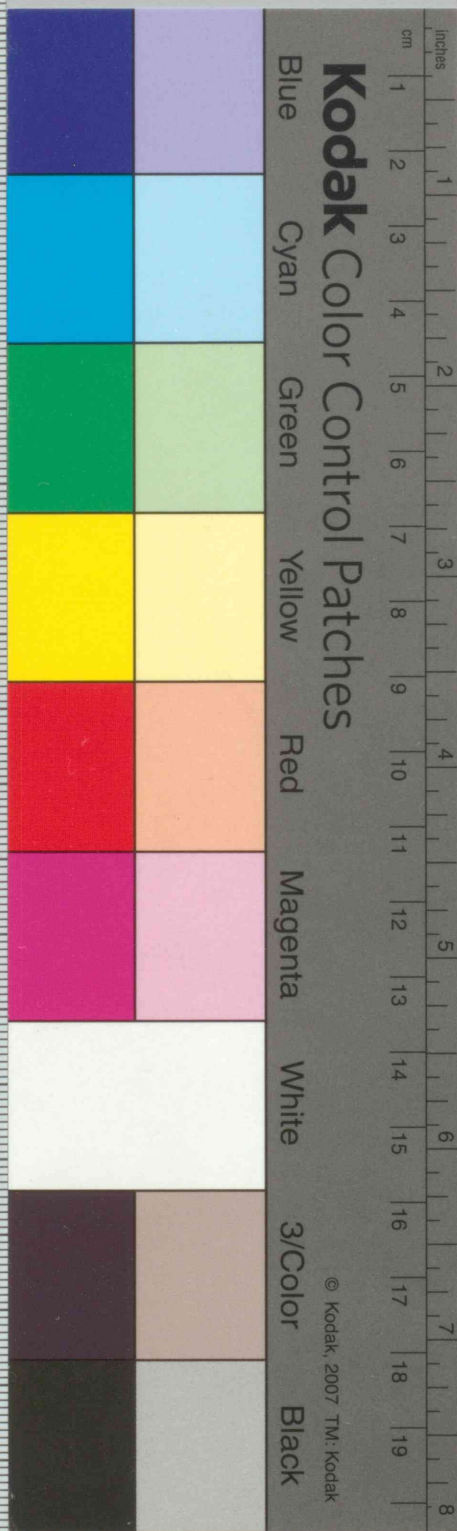
新国語 三年上

文部省検定済教科書



KC
Mi65

教科
34
013



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60259

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49802



指導者のために

(一) この本は、地域社会の生活に取材し、その基本的な諸条件について注意をうながしながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として理解と表現の学習が興味のうちにも有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は次の四つの題目に分かれている。

一 たんぼぼ

児童の自主的自立的な行動を主題として、詩・生活文・戯曲を提出し、本学年における言語生活の基本的態度を示すことにする。

二 子どもの日

「子どもの日」にちなんで、地域社会における、相互依存の関係や、通信に関する理解などを深めながら、その生活の視野を広め、手紙・生活文・詩・シナリオを提出して、多様な言語生活の展開に努めることにする。

三 つゆのころ

気象と生活（特に衣服）に取材し、日記文・生活文などを提出して生活経験を深めると共に、言語と行いに関連に留意して、真実な言語生活に導くことにする。

四 テント

環境と生活（特に住居）の基本的条件を主題とし、生活文・物語を提出し、現在と過去の生活を比較言語と生活の経験を思考して夏休みにおける学習構えを整えることにする。

(三) この本に提出した新出語は二〇九語で、毎ページの新語率は二・六一語である。学習の仕方・新語表・新字表を備用使用上の便を図ると共に、文章は敬体口語を主としながら次第に常体口語にも慣れさせるように留意した。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい四月から七月（地方によつては八月）までを目標として、大題目を平均一か月あてとしながら、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

（右は本書編集の概要である。詳細は新国語指導書を参照せられたい。）

広島大学図書

0130449802



昭和二十五年八月十二日
文部省検定済
小学校国語科用

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449802

たんぼぼ

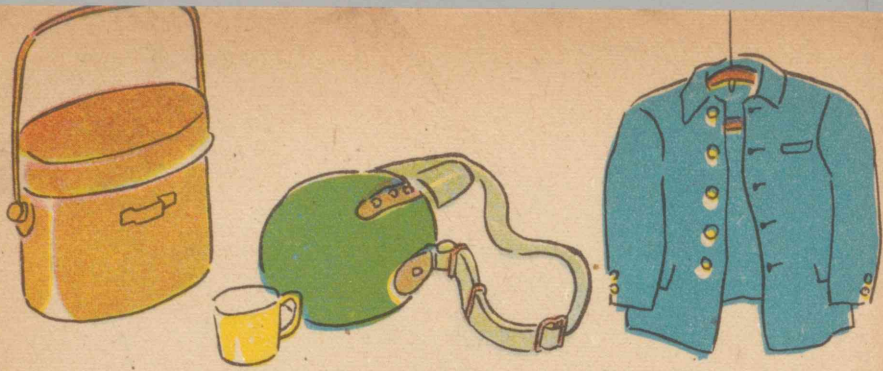
広島大学図書

0130449802



新国語 三年上

広島大学
教育学部図書



学しゅうの仕方
新しいことば
かん字表

81

四

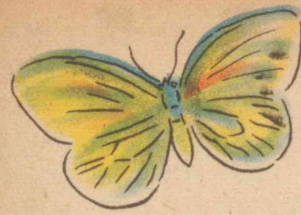
- テント
- (一) テント
- (二) キャンプを たずねて
- (三) はなれ小島の人

61

三

- つゆのころ
- (一) 日記
- (二) 天気よほう
- (三) 虫ぼし

43



一

もくろく

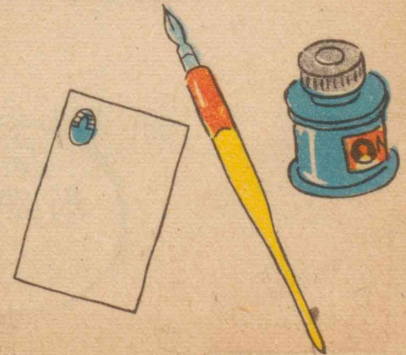
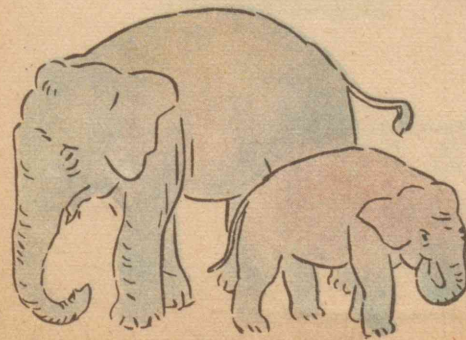
- たんぽぽ
- (一) 朝の道
- (二) 麦畑
- (三) たんぽぽ

4

二

- 子どもの日
- (一) ゆうびん
- (二) 子どもの日
- (三) ぞうのたび

21



一 たんぽぽ

(一) 朝の道

さくらの つぼみが ふくらんで、
白い 雲が 光って いる。
なんだか 新しい けさの 道。

新しい 本、
きょうから 読みだす「朝の 道」。
「しつかり やろうね。」



道ばたの 草に、
ちらちら うごく ぼくたちの かげ。
きえかけた 山の 雪が、
白い うまの かたちに 見える。
あの うまに のって、どこまでも、
かけだして いきたいような 朝だ。



(二) 麦畑

ちよこさんが、おさらいをしで、いますと、
「これを畑の人たちに持って、いって、おくれ。」
と、おばあさんが、おっしゃいました。

「はい。」

ちよこさんは、すぐ、どろぐを、かたづけました。そして、
おちやを、いれた、土びんど、おいもを、いれた、ふるしき、
づつみを、さげて、出かけて、いきました。

うらの、くわ畑を、通って、いきました。くわの、新芽が

長く、のびて、いました。くわ畑、
を通りぬけると、麦畑が、ひろ、
びると、見わたされました。ちよ、
こさんの、うちの、畑には、きり、
の木が、一本、立って、いるの、
で、それが、目じるしに、なりま、
した。

ちよこさんは、小声で、歌を、
歌いながら、歩いて、いきました。
すっきりと、晴れた、空では、ひ、
ばりが、しきりに、さえずつて、



いました。

青々と のびた 麦畑の 中で、三人の 黒い かげが
うごいて いました。せなかだけしか 見えないので、どれ
が、だれだか、よく わかりません。ちよこさんは、右が
おとうさん、まん中が おじいさん、左が おかあさんだろ
うと 思いながら 歩いて いきました。

すると、まん中の 人が ひよいと 立ちました。頭に
かぶった 手ぬぐいで、おかあさんだと いうことが、遠く
からも すぐ わかりました。ちよこさんは、おかしく な
って、くすくす わらいました。おかあさんは ちよこさん
を みつけて 手を ふりました。

おじいさんも、おとうさんも、こしを のばして こちら
を 見ました。ちよこさんは、急いで 三人の方へ 歩い
て いきました。

大きな 声で、

「おちやを 持って きましたよ。」

と いいますと、おとうさんが、

「ありがとう。のどが かわいて こまっ
て いた ところ
だ。」

と おっしやいました。おじいさんも、

「よく 持って きて くれたね。」

と、にこにこして おっしやいました。

きりの木の 下に、こしを おろして おちやを のみ
ました。ふろしきづつみを といて おいもも だしました。
おじいさんは あせを ふきながら、

「うまい、うまい。」

と 言って、口を もぐもぐ
させて たべました。おとうさ
んは おいしそうに おちやを
のみながら、

「ちよこが、持って きて く
れたので、なお おいしい。」
と おっしゃいました。



「三年生に なったら、よく
お手つだいが できますね。」
と、おかあさんが ほめて く
ださいました。そして、

「さあ、あなたも おあがり。」

と 言って、おいもを とって くださいました。いつもの
おいもより おいしいような 気が しました。

「さあ、はじめようかね。」

おじいさんの 声に、みんなは 立ちあがりました。
ちよこさんが、

「わたしも お手つだいしますよ。」



と 行って、おかあさんの あとに ついて いきました。

おかあさんが、

「ほら、ちよちゃんが ふんで くれた ところ、こんなに
よく のびて。」

と おっしやいました。

ちよこさんは、麦ふみを した 日の ことを 思いだし
ながら、畑の 草とりを しました。畑の すみで、ひとか
ぶの たんぽぽの 花が さきかけて いました。むしろ
かと 思いましたが、さきかけの 花が かわいいので 残
して おきました。

空では、ひばりが いい 声で なくて いました。

(三) たんぽぽ

出る人 たんぽぽ(女) たんぽぽの 葉、1234(男)

北風(男) 雪(女) 春風(女)

はち(男) ちようちよ(女) たんぽぽの子(男・女・おおせい)

春の 風 — 一の ばめん

たんぽぽの 花と 葉が、寒そうに 手足を ちぢめて いる。黒い きれを
つけた 北風が、遠くを 見ながら 立っている。白い きれを つけた 雪が、
あたりに こな雪を まきちらしながら 出て くる。



雪 どうしたの、北風さん。

北風 …… (だまっている。)

雪 わたし、もっと 雪を ふら
 せたいわ。いつものように
 ふいてね。

北風 でも、春風が 近づいて き
 たらしいよ。

雪 え、春風が。

北風 ほら、南の方で 音が し
 て、いるだろう。

雪 (じっと耳をすまして) まあ、ほん

とに 春風さんだわ。

北風 これで、ぼくたちの 冬も おわりだね。

雪 そういえば、きょうは いくら すらせても、雪が
 つもらないわ。

北風 いよいよ みんなとも おわかれた。なつかしいなあ、
 あの 山も、この 村も。

雪 あら、たんぽぽさんが ふるえて いるわ。たんぽぽ
 さん、わたしたち、北の 国へ いくのよ。

たんぽぽ 北へ。それでは、もう 春が きたの。

北風 よく しんぼうしたね、冬の 間。

たんぽぽの葉ー あなたに ふきどばされないように、深く 土の 中

に 根を おろして いましたよ。

雪 つめたかったでしょう、わたしが くる たびに。

たんぽぽ つめたかったけれども、からだか 強く なったわ。

北風 いまに きれいな 花が さくよ。聞えるだろう、あ

の 音は 春風だよ。

たんぽぽの葉 2 聞える、聞える。

たんぽぽ いやいよ 春が きたのね。

雪 さあ、いきましよう、北風さん。たんぽぽさん、さよ

うなら。元気で 春を むかえて くださいね。

北風と 雪は 手を つないで むこうへ いく。たんぽぽと その 葉たちが、せの

びをする。 「春が きた、春が きた。」と、どこからか 歌う声

が する。 うすい みどり色の きれを かぶった 春風が、おどりながら 出て くる。

たんぽぽ あ、春風さん。

春風は、手に 持ってきた 黄色の 花の かんむりを、たんぽぽの 頭に かぶ せる。

風に のって — 二の ばめん

たんぽぽの ぼうしが、白い わた毛に なって いる。たんぽぽの 葉たちが、

音がく に あわせて 手を うごかして たいそうを して いる。

やりと つぼを 持った はちが くる。

は ちこんちは、たんぽぽさん。

たんぽぽの葉2 やあ、はちさん、きょうはどこまでいったの。

は ちなの花畑をまわってきたのさ。こんなにたく

さん みつをもらってきたよ。(つぼを見せる。)

たんぽぽの葉3 毎日 たのしそうだね、はちさんは。

たんぽぽ だって、今が一ばんはたらく時ですものね。

は ち たんぽぽさんだって、今がいそがしい時でしょう。

たんぽぽ ええ、きょうも子どもたちを方々へ送り出すん

ですよ。

は ち さつきも、畑の上を、たんぽぽの子どもがおお

ぜいでとんでいきましたよ。

おんがくがはいる。

たんぽぽ あ、風がでてきたわ。

たんぽぽは、ぼうしから白いわた毛を

とって、右の方へまく。すると、それ

が白いふくを着たたんぽぽの子ども

どなって、右の方からおどりながら出

てくる。

つきに左にまく。左の方からもおおぜ

いの子どもが出てくる。みんないっし

よになってたんぽぽのまわりをおどる。

そこへ、ちょうちよがおどりながら出てくる。



たんぼぼ あ、ちようちよさん。今から 子どもたちが たびに
出るのです。そこまで 送って やって ください。
ちようちよ ええ、送って あげましょう。さあ、みなさん、わた
しと いっしょに、この 風に のって いきましょ
う。

は ちぼくも 送って あげよう。

たんぼぼ みんな、元気に とんで いくんですよ。

たんぼぼの 子どもたち、こっくり こっくり うなずいて おどる。

たんぼぼの 葉たち さようなら。なかよく とんで いくんだよ。

たんぼぼ、たんぼぼの 葉たちが 手を ふる。子どもたちは、はちや ちようちよと
おどりながら、ひとり ふたりと むこうへ いく。

二 子どもの日

(一) ゆうびん

ゆたかさん。

こんどの「子どもの日」に、あそびに いく やくそく
を して いましたが、いかれなく なりました。ぼくた
ちの 学校で、その 日に、おいわいの 会を する こ
とに なったからです。

せっかく 楽しみに して いたのに ざんねんです。
ぼくが いく かわりに、ゆたかさんが きませんか。ぼ

私たちの学校の おいわいの 会も、見て ほしいと
思います。ぼくたちは「たんぽぽ」の しばいを します。
ぼくが 持って いく つもりで、買って おいた こ
いのぼりを、きょう 小包みで 送ります。かわいい こ
いのぼりです。

では、おまちして います。 さようなら。

五月一日

まさお

「おかあさん、ゆたかさんに 手紙を 書きましたから、ふ
うどうに あて名を 書いて ください。」

と、まさおさんが いいました。

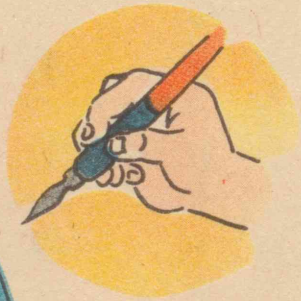
おかあさんは、

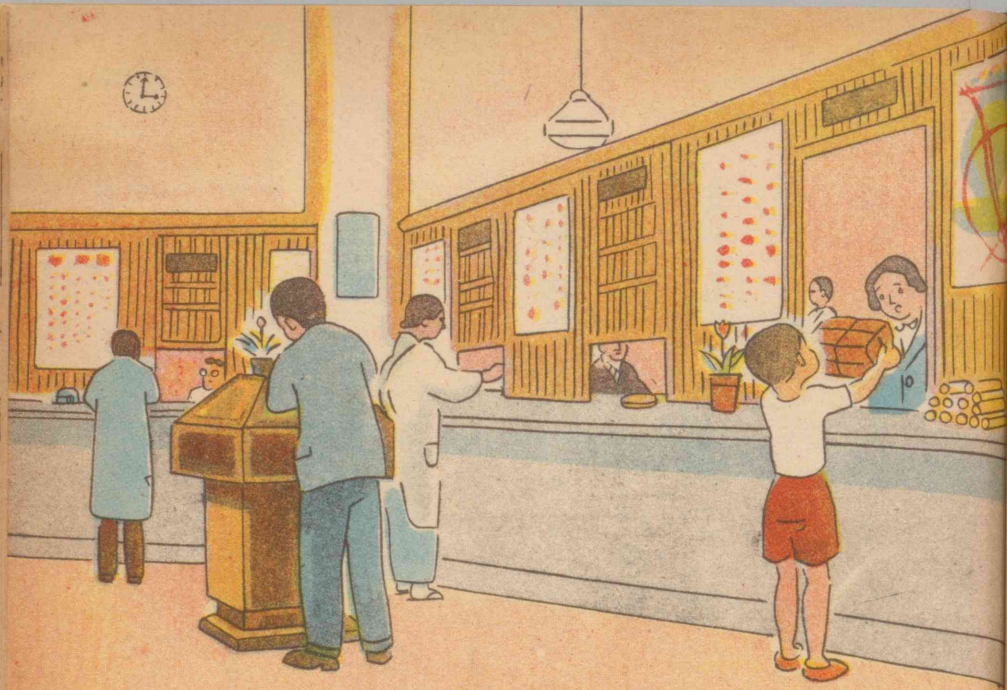
「三年生に なったのですから じぶんで 書いて ござらん。」

と 言って、ペンと インクを
かして くださいました。

ペンで 字を 書くのは はじ
めてなので、べつの 紙に けい
こを しました。

なかなか うまく 書けません。
けれども、おとなに なったよう
で うれしい 気持が しました。





手紙が まい子に ならないように、一字 一字 ていねいに 書きました。

小包みは、おかあさんに 作って もらいました。

まさおさんは、手紙と 小包みを 持って ゆうびん局にいきました。

ゆうびん局には、まど口が いくつも ありました。

まさおさんは、手紙に きつてを はって 出しました。

それから、小包を 受けつける まど口で、

「これを おねがいます」

と 言って、出しました。

かかりの 人が、

「何が はいつて いますか。」

と ききました。

まさおさんは、

「こいのぼりです。」

と こたえました。

かかりの 人は にっこり

わらって、送る 手つづきを

して くれました。

まさおさんは、早く とどけ

ば いいと 思いました。

(二) 子どもの日

まさおさんたちは こいのぼりを あげました。

「やあ、およいだ、およいだ。元気が いいなあ。」
弟の ふみおさんも 大喜びでした。

風が ふいて きて、や車は からからと 音を たてて
まわりました。こいのぼりは 大きな 口で、風を いっぱ
いに のんで、ゆらゆらと 空を およぎました。

「わん、わん。」

くろが、急に おを ふって かけだして いきました。

ゆたかさんと おじさんが、門を はいって きました。ま
さおさんたちも かけだして いきました。

「ぼくの 手紙、ついたの。」

「どうも ありがとう。小包みも ありがとう。けさ 早く
起きて、こいのぼりを 立てて きたよ。」

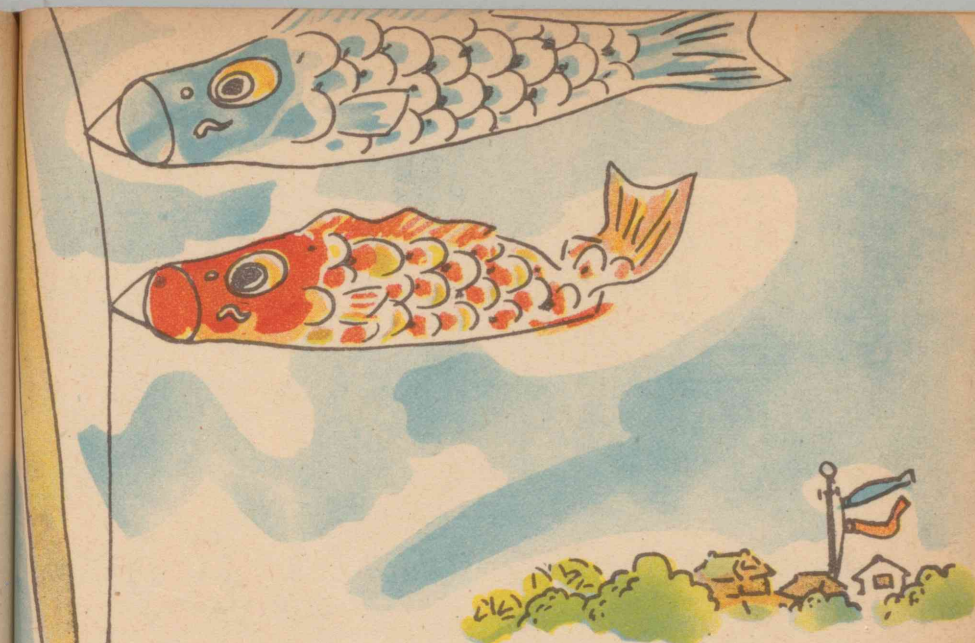
「村の 友だちも、みんな 元気。」

「元気さ。みんな、あそびに きて ほしいと 行って い
たよ。」

ふたりで 話を して いると、

「ぼくにも きて ほしいって いったんでしょう。」

と、ふみおさんが まじめな 顔で ききました。



「あ、どうぞ おいで ください」
 て、いったよ。」
 ゆたかさんは、ふみおさんの 頭
 を なでて やりました。
 おじさんが、ちようど 町に 用
 事が あったので、ゆたかさんも
 いっしょに きたのでした。
 「ほうら、おみやげだよ。」
 と いって、おじさんが ふろしき
 包みを どさりと おきました。
 その 中には、ちまきや かしわ

もちが はいって いました。みんな 大喜びで さっそく
 たべました。

「ぼくたちの 学校では おいわ
 いの 会が あるんだよ。」
 「いって 見たいなあ。きみ、し
 ばいを するんだって。」
 「そう。『たんぽぽ』といふ しば
 いさ。ぼく、はちに なって、
 たんぽぽの 花と お話を す
 る 役さ。」
 「ぼくも 見に いって いいの。」



「いいとも。いっしょに　いこうよ。おいわいの　会は、ひるまでで　おわるから、ひるから　どこかへ　いこう。」

「なにか　おもしろい　ことが　あるの。」

「子どもの　えいが会が　あるよ。それから、新聞社では、『世界の　子どもたち』と　いう　しゃしんの　てんじ会があるんだって。」

「いいなあ。」

「それに、公会堂では　お話会も　あるし、町の　人たちの　うんどう会も　あるよ。」

「ぼく、えいがと　てんじ会が　見たいなあ。」

ふたりで　話しあって　いると、よしこさんが　さそいに

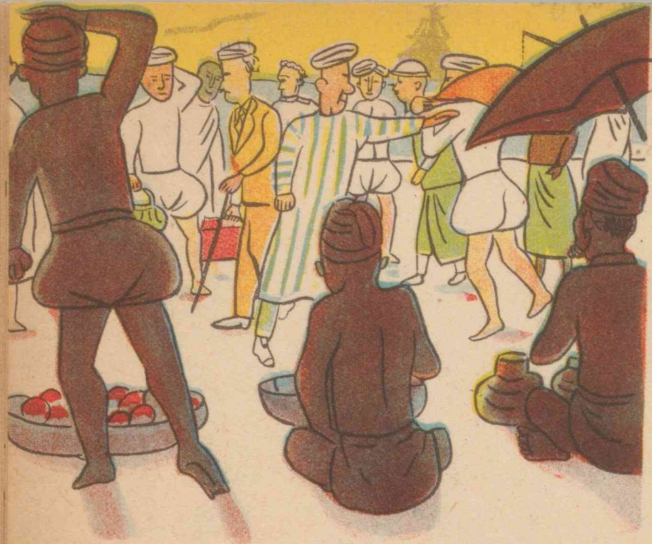
きたので、三人で　学校に　出かけました。

いい　天気でした。どこの　うちにも、日の　まるのは　たが　立って　いました。空には、こいのぼりが　およいで　いました。

まさおさんたちの　学校で　作った「子どもの　日の　歌」を、ゆたかさんに　教えて　あげました。いっしょに　歌いながら　歩いて　いきました。

子どもだ、子どもだ。日本の
明るい　子どもだ。

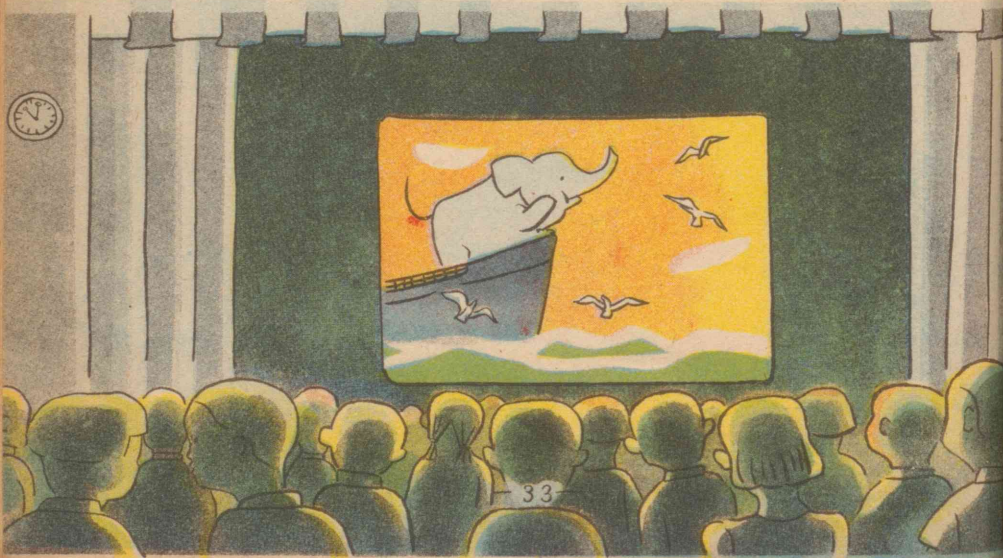
五月の　空だ。



これは、まんがの シナリオです。

(三) ぞうの たび

ー みなと
 白い ターバンを
 まいた インド人の
 物売り。その 前を
 通る たくさんの
 人。



青葉だ、わか葉だ。
 のびろよ、のびろ。
 きょうは 楽しい 子どもの 日。

子どもだ、子どもだ。手を つなぐ
 世界の 子どもだ。
 五月の 風だ。
 かがやく みどりだ。
 歌えよ、歌え。
 きょうは うれしい 子どもの 日。



汽てきの音。
立ちあがって 海の方を見る 物売り。

2 汽船

手をふる 見送りの人たち。そのむこうに、けむりを
はいて いる 大きな 汽船。

3 デッキ

いかりを まきあげる くさり。
てすりに 近づく ぞう。
みなどを 見て いる ぞうの 小さな 目。うちわのよ

うに 動く 耳。はなを 動かす たびに、ゆれる 首の
すず。

ぞうの そばに とんで 来る かもめ。

「見送りに きましたよ、ぞうさん。」

「ありがとう。」

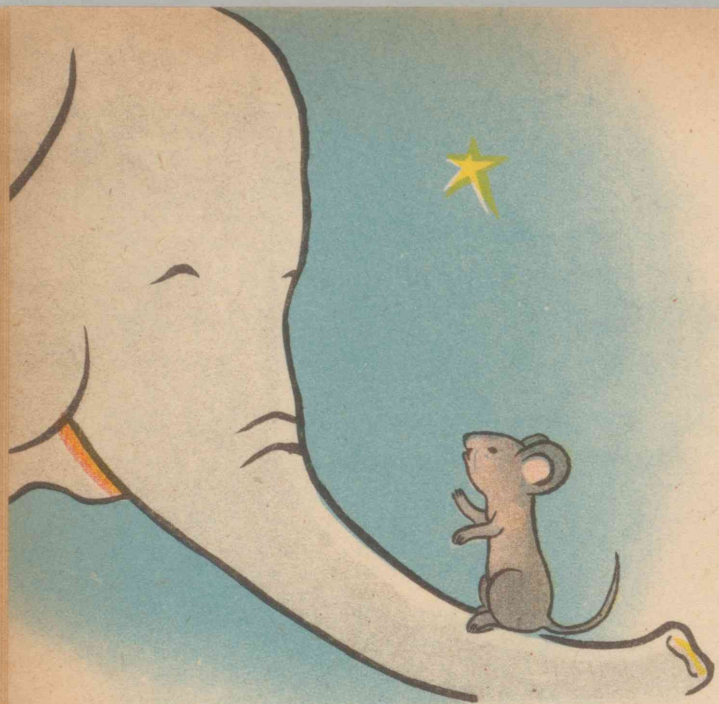
はなを 高く あげる ぞう。

また、汽てきの 音。

4 海の上

遠く なって いく みなどの 町。

汽船の 通った あどの、白い 波の すじ。その上を



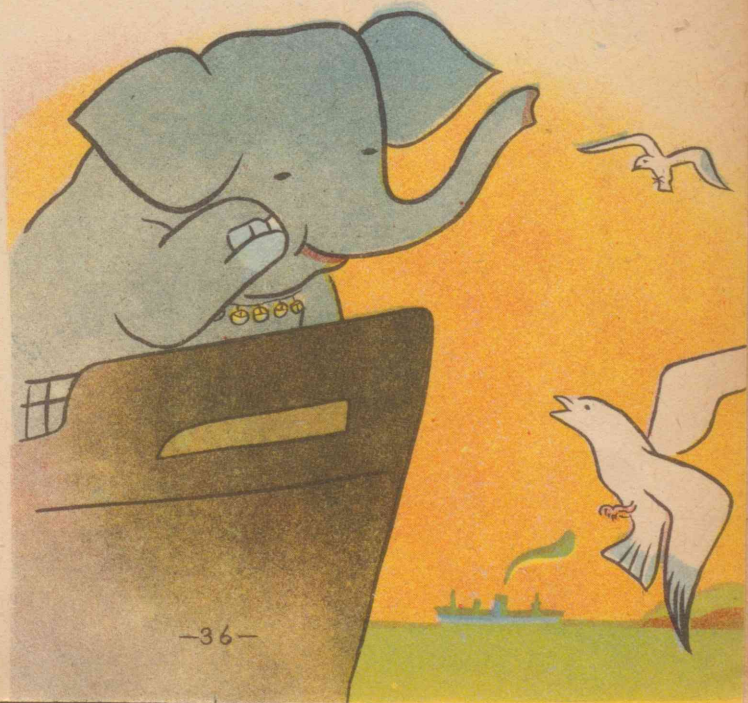
電とうの 光に てらされて いる ぞうの よこ顔。
 デッキの くらい 所から、ぞうの 足もとに 走る ね。
 ずみ。

「ぞうさん、こんばんは。……ぞうさん、……こんばんは。」
 「だれ、ぼくを よぶのは。」
 「あぶない、あぶない。そんなに足を 動かさないで。」
 「なあんだ、ねずみさんか。はなを かして あげるから、のぼって おいで。」

6 夜の デッキ

5 空
 しずんで いく お日さま。
 雲の 光が、だんだん きえて いく——。

高く ひくく とぶ かもめたち。
 「ごきげんよう、ぞうさん。」
 「ごきげんよう、ぞうさん。」
 — はなを ふって、「さようなら」
 を する ぞう。



ぞうのはなを ちよろちよろ のぼる ねずみ。

「ぞうさんは 日本に いくんでしょう。」

「どうして 知って いるの、きみ。」

「ラジオで 聞きましたよ。日本の 子どもたちが、ぞうさんの 来るのを まって いるって……。」

「そう。早く いきたいなあ。」

7 朝の海

海から のぼる 朝日。きらきらと 光る 波。

8 デッキ

水を 流して そうじを して いる 船員たち。

パン、じゃがいも、草などを 入れた かごを 持って

来る インド人の ぞうつかい。

それを見て、目を 細く する ぞう。

9 海の上

あれる 海。ゆれる 船。はしらに はなを まきつけて

からだを ささえる ぞう。

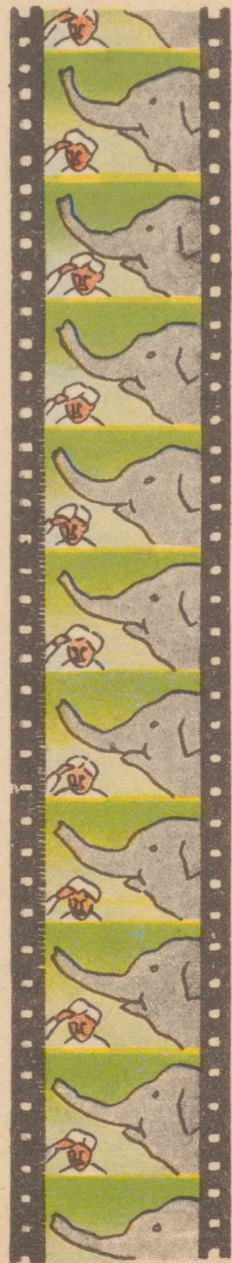
しずまる 波。

海の むこうに 出て くる 大きな 月。

月夜の 海を、かげの ように 走って いく 汽船。

10 スクリュー

いそがしく まわる スクリュー。まきかえす まっ白な
波の うず。



11 デッキ

ぞうの そばに、立って 遠くを 見て いる ぞう
うつかい。

高く はなを あげる ぞう。

にもつの 上で、同じ 方を見て いる ねずみ。

12 海の上

海の上の 雲。雲の 間に そびえて いる ふじ山。

13 えんがわ

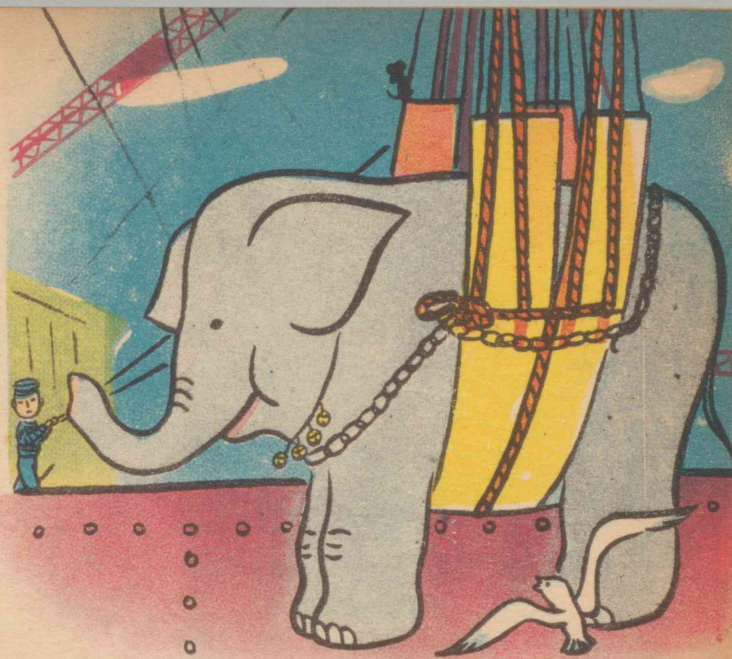
ぞうの 絵を 書いて いる、男の子と 女の子。

「インドから きたら 寒いでしょうね。」

「ぞうの 家には、ストーブが つけて あるから だいじよ
うぶさ。」

「そう。早く 見たいね。」

14 デッキ



16 船つき場

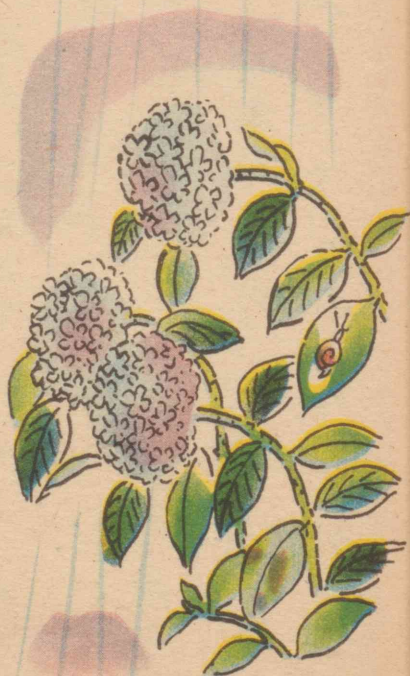
うれしそうな 子どもたちの 顔。その 中に ぞうの 絵を 書いて いた 男の 子と 女の子。

クレーンに つるされた ぞう。
つなにつかまった ねずみ。
「さあ、日本ですよ。あんなに
たくさんの子どもたちが む
かえに きて います。」
喜んで はなを ふって いる
ぞう。

三 つゆの ころ

(一) 日記

六月四日 水 雨



きょうも 雨ふりだ。外で あそべないので つまらない。
おひるの ごはんの あとで、先生が、
「みんなの ことばは たいへん よく なったが、どうさ
が まだ よく できて いない。」
と 言って、どうさど いう ことについて お話を し
て くださった。

お話の　うちで、一ばん　やさしい　どうさの　けいこを
して　みる　ことに　なった。

しせいを　正して、ろうかを　まっすぐに　歩くとい
だけの　ことで　あるが、なかなか　むずかしかった。

よしこさんは、この　前の　しばいでも、どうさが　よい
と　いって　ほめられたが、きょうも　一ばん　じょうずに
できた。

六月五日　木　雨

学校に　いく　とちゅう、一年生の　女の　子が、げたの
はなおを　きらして　こまって　いた。六年生の　人が　な

おして　あげた。ぼくは　かさを　さして　あげた。

おひるの　時間に、また、どうさの　けいこを　した。き
ょうは、水が　いっぱい　はいて　いる　コップを、両手
で　持って　こぼさないように　歩くのだった。

しせいを　よく　すると、水も　こぼれず、はやく　歩け
る　ように　思った。その　けいこで、ぼくは　みんなに
ほめられた。

学校から　かえってから、妹に　てるてるぼうずを　作っ
て　やった。

六月六日　金　くもり



田うえて いそがしく なったので、おかあさんが ゆた
かさんの 家に 手つだいに いく ことになつた。弟も
いくので 喜んで いた。駅まで 送って いった。

夕方、やくそくの あじさいの
花を、よしこさんの うちに 持
って 行って あげた。おばさん
が たいへん 喜んで、その う
ちの 一本を さし木に すると
いわれた。
つゆの ころの さし木は、よ
く つくそうだ。

やっと 雨が やんだ。
校ていが ぬれて いるので、きょうも 外あそびは でき
なかつた。
学校放送は「三年生の 時間」だった。「手紙の たび」とい
うので あつた。ポストに 入れた 手紙が、あて名の 人
の 所に とどくまでの お話で あつた。
お話が しばいのように なつて いて、たいへん おも
しろかつた。

六月七日 土 雨
けさ 起きて みたら、また、雨が ふつて いた。

六月八日 日 くもり

きょうから おかあさんが 来るすだ。おばあさんが おかあさんの かわりだ。ぼくは おばあさんに 手つだって そうじを した。

庭の すみを ほり 起して、 だいを まいた。二十センチぐらい はなして、 ふたつづつ まいて おいた。だいが みのるまで、 しっかり かんさつしようと思ふ。 おかあさんが いないので、 れいこは しょんぼりして いた。おさらいが すんでから 本を 読んで あげた。 ひるから、 れいこを つれて よしこさんの 家に あそびに いった。近所の 友だちを よんで、 みんなで あそ

んだ。ことばあそびや、 どうさだけの しばいを したりして あそんだ。

六月九日 月 くもり のち 晴

校庭が かわいたので、 ひさしぶりで やきゅうを した。 ぼくたちの 組が かった。

べつに だいた日記を 書きたいと 思って、 新しい ちようめんを 買って いただいた。こん気よく 書きつけて いく つもりだ。

あすは 遠足だ。このまま 晴れて くれれば いいと思ふ。夜、 天気よほうの やじろべえを 作って みた。

(二) 天気よほう

「あすは 遠足だど いう こ
とだが、雨かも しれないな。」
夕はんを 食べながら、おじ
いさんが おっしゃいました。

まさおさんは、

「ラジオの 天気よほうでは、晴れると
いいですよ、おじいさんは、

「でも、ごはんつぶの はなれぐあいが
よすぎる。」

と おっしゃいました。

「それは どう いう わけですか。」

姉の けいこさんが ききました。

「にぎりめしを にぎるのに、手に 水をつけて
にぎる」
だろう。それと 同じで、空気が しめって
くると、ちゃ
わんから ごはんつぶが よく はなれるのだよ。」

おじいさんが 教えて くれました。

ごはんが すんでから、まさおさんは
ねえさんと そう
だんを しました。

「ねえさん、なんとか して、あすの
天気を 知る しか
けが 作れない ものでしょうか。」



「そうですね。おじいさんの お話の、空気の しめりぐあ
いを みる しかけを 考えだしたら どう。」
そこで、ふたりは いろいろ 考えて みました。
まさおさんは、こんな お話を 読んだ ことを 思いだ
しました。

「むかし、うまが せなかに しおの はいった たわら
をつんで、川を わたりました。つまづいて 川の中
に たおれますと、しおが 水に とけて にもつが か
るく なりました。

その うまが、こんどは かいめんを いっぱい つん
で、川を わたりました。うまは この 前の ように、

また、かるく して、やろうと 思いました。川の 中に
わざと たおれました。すると、かいめんに 水が しみ
て、動かないほど 重く なって しまいました。」
まさおさんは、

「ねえさん、いい ことを 考えつきましたよ。物が しめ
ると 重く なるでしょう。その ことを くふうして
みたら どうでしょう。」

と いいました。ねえさんは、

「そうね。わたしも、その ことを 考えて いた ところ
よ。しめりやすい 物と、しめりにくい 物とを つりあ
わせて おいたら いい わけですね。」

と いいました。

そこで、まさおさんは おとうさんから かいめんを もらって きました。

ねえさんは、

「これを 使いましょうよ。」

と 言って、つくえの ひきだしから やじろべえを 出しました。せんだって、工作で 作った ものでした。

やじろべえの 右手に かいめんを つるしました。左手に えんぴつを つるしました。なんども えんぴつを け

ずって つりあいを とりました。つりあった やじろべえを、つくえの はしに 立てて ねました。

朝 早く 目を さました まさおさんが、

「ねえさん、雨らしいですよ。」

と 言って、ねえさんを よびました。やじろべえの かいめんの 方が さがって いたからです。

まどを あけて 見ると、からりと 晴れて いました。

ゆづべ、にわか雨が あったと みえて、庭の やつでの 葉が ぬれて いました。ラジオの 天気よほうも、おじいさんの おっしゃった ことも、あたたか わけでした。

ふたりは 喜んで 遠足に 出かけました。



(三) 虫ぼし

つゆが 晴れて、よい 天気になりました。よしこさん
の うちでは 虫ぼしを しました。

へやの 中に つなを かけわたして、しまつて おいた
着物や ようふくを かけました。かびの においと、しょ
うのうの においが へやを 流れました。

「古着屋さん みたいだなあ。」

と いった、おとうさんが わらいました。

たんすの 中を そうじしたり、こうりや トランクを

日に あてたりしました。べ
ンジンで よごれを とった
り、アイロンで しわを の
ばしたりして、おばあさんと
おかあさんが いそがしく
はたらきました。よしこさん
も、ようふくに ブラシを
かけたりして 手つだいまし
た。おばあさんが、着物を
といた きれを ひろげて、
「これ、よしこの 夏の 服」



に したてたら どう。」

と、おかあさんに おっしゃいました。

「じょうぶな きれですね。でも もったいなくって。」

「いいんだよ。もう、わたしは 着ないのだから。」

と いった、おかあさんに わたしました。

よしこさんが、その きれに さわって みて、

「これ、あさでしよう。」

と いいますと、おばあさんは、

「そうだよ。よく わかるね。わたしが わかい ころ、おっ

たのだよ。もう、これだけに なって しまった。」

と おっしゃいました。

「おばあさんが ごじぶんで。」

よしこさんが 目を まるく して いいました。

「今は、きかいて どんどん おって しまうけれども、む

かしは、ふだん着などは じぶんで おった ものだよ。」

と、おばあさんが おっしゃいました。

「むかしの 手おりですから、ずいぶん しっかりして い

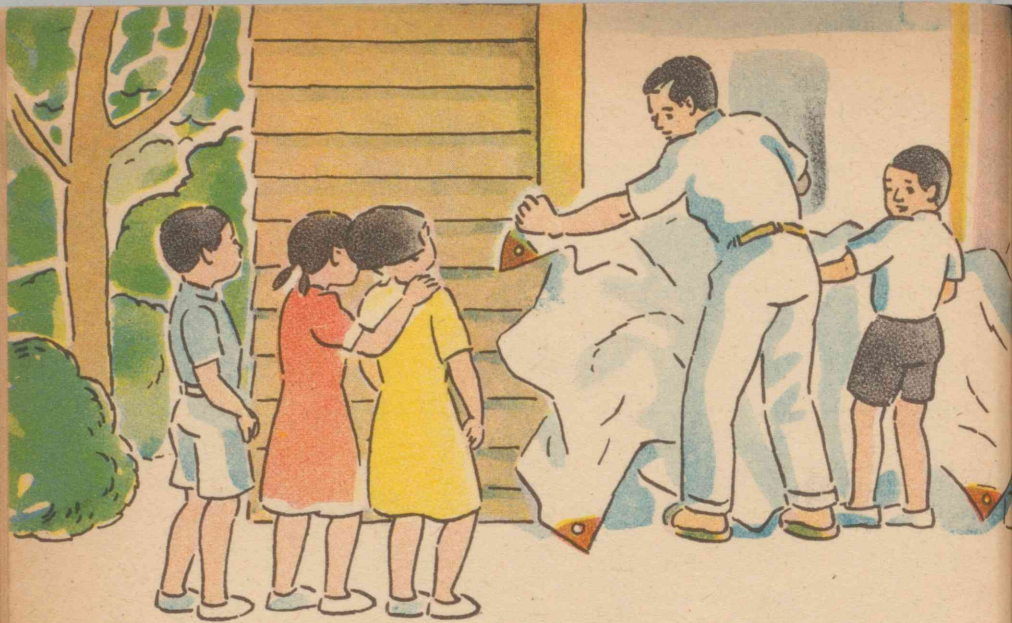
ますね。では、いただいて よしこの 服に しましよ。」

おかあさんは そう いった、ていねいに たたみました。

よしこさんは、

「おばあさん、どうも ありがとう。」

と、お礼を いいました。



「あしたから、この服を着てもいいでしょう。」
 よしこさんが、白いかんたん服をさしていいました。
 「いいですよ。でも、小さくなくていいませんか。」
 と、おかあさんがおっしゃったので、着てみました。す
 ると、それでもたけもみじかくなくていいました。
 「おや、まんがで見たようなおじょうさんだよ。」
 と、おとうさんがおっしゃったので、みんなわらいまし
 た。おかあさんが、
 「まあ、ずいぶん大きくなりましたわ。——ぬいこみを
 出して、したてかえてあげましょう。」
 とおっしゃいました。

四 テント

(一) テント

ひさしさんのにいはんは、大学
 生です。夏休みに、なったので、帰っ
 てきました。
 まさおさんたちが、あそびに、い
 くと、庭に、テントを、ひろげて
 ほして、いました。
 「にいはん、キャンプを、なさるの。」

ですか。」

まさおさんが たずねますと、にいさんは、

「近い うちに いく つもりだ。きょうは 天気がいい」

ので、テントを ほして いる ところさ。」

と いいました。

「どこで キャンプを なさるのですか、にいさん。」

よしこさんが ききました。

「ことしは 海岸に いこうと 思って いる。——ほら、

あの 海岸の まつ林さ。」

と、にいさんが いいました。

「わあ、いいなあ。ぼくたちも いきたいなあ。」

「わたしたちも つれて 行って くださいよ。」

と、みんなが ロ々に いいました。

にいさんは わらいながら、

「まだ 小さいから、キャンプは むずかしいよ。」

と いいました。みんなは、

「だいじょうぶですよ。つれて 行って ください。」

と たのみました。にいさんが、

「では、一日だけ あそびに きて ごらん。キャンプを

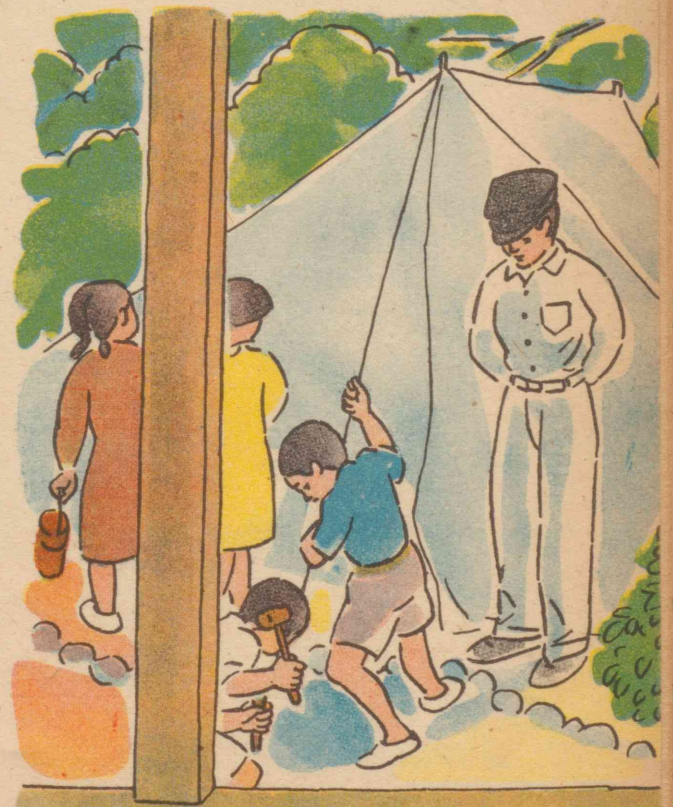
する 時、しらせて あげるからね。」

と いいましたので、みんなは 喜びました。

「にいさん、テントを はって みせて ください。」

とおねがいすると、
「では、みんなでは
って みようか。」
と、いいました。

まず、テントの 屋
根に なる ところを
ひろげました。ひさし
さんが、その 中に もぐって、いって、しちゆうを 立て
ました。にいさんの さしず に したがって みんなは く
いを 土に 打ちこんだり、つなを ひっぱって しちゆう
を ささえたり しました。



「やあ、できた、できた。」

みんなは 喜んで、中に はいって みたり、外に 出て
みたり しました。

そよそよと 風が ふいて きました。テントは ふわり
と ふくれたり、ぱたぱたと 音を たてたり しました。

「雨が 流れこんで こないように、また、風に ふきたお
されないように、テントを はるには こまかな 注意が
いるのだよ。」

と、にいさんは いろいろ お話を して くれました。
「大きく なったら、キャンプに いこうね。」
テントを かこんで、みんなで、話しあいました。

(二) キャンプを たずねて

ぎあ、ぎぶん。

ど、波の音が聞えてきました。まつ林のむこうの方に、テント村が見えてきました。

「どのテントかしら。」

よしこさんはたちどまっていいました。

「あそこまで、行ってみようよ。」

まさおさんたちが歩いていくと、

「おうい、ここだよ。」

ど、一ばんはしのテントのところ、手をあげてよんで、いる人がありました。ひさしさんの「にいさん」でした。

「にいさあん。」

みんなはかけだしていきました。

日にやけて、見ちがえるほどまっくらになった。いさんが、「にこにこわらって立っていました。」

「やあ、よくやってきたなあ。」

にいさんの友だちの大学生も、テントの中から出てきてむかえてくれました。

「おかあさんが、これをよこしましたよ。」

ひさしさんは、持って きた
包みを にいさんに わたしま
した。にいさんは、

「ありがとう。」

と、いって、それを 開いて
みて、

「やあ、牛肉だ。おいしい ござ
ちそうが できるぞ。」

と、いいました。

みんなは、テントの 生活を
みせて もらいました。中には

ござが、しいて あって、にい
さんたちの 持ち物や、もうふ
が、きちんと せいとんされて
いました。

「ござを めくって、ござらん。」

にいさんが おっしゃったので、めくって みました。ござ
の下には、かれ草や まつ葉などが しきつめて あり
ました。

「土を 平らに したり、ひえこまないように くふうする
ことが だいじだ。」
と、にいさんが いいました。



テントの まわりには みぞが ほって あつて、雨水が
テントの 中に 流れこまないように して ありました。
テントの つなを ゆわえた、くいが、土の 中に ななめ
に 深く 打ちこまれて いました。

「こうして おけば、雨が ふっても、風が ふいても だ
いじょうぶだろうね。」

と、みんなで 話しあいながら くわしく 見ました。

「さあ、おひるの したくに かかろう。」
と、にいきさんが いったので、みんなは 持って きた や
さいや 米を 出しました。

まさおさんと ひさしさんは、林の 中に かれえだを

ひろいに いきました。よしこさんと みどりさんは、やさ
いを あらいました。

あなを ほって ごみためを 作ったり、みぞを ほって
使った 水を 遠くに 流したり、えいせいにも よく 注
意して くらして いる ことが わかりました。

はんごうで ごはんを たきました。ぼうの 先で、はん
ごうを とんとんと たたきました。その 音で、ごはんが
できたか どうかを しるのでした。おかずも つくりまし
た。にいきさんたちに 教えて いただいて、みんなで 楽し
く おひるの したくを すすめて いきました。

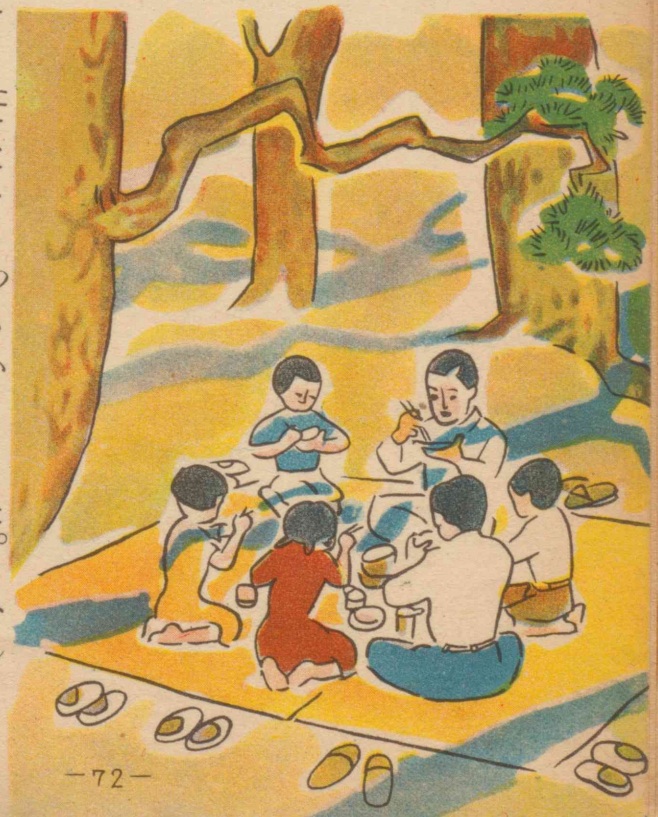
日かげに ごさを しいて 食器を ならべました。ぐる

りと わに なって、みんな
なで ごはんを いただき
ました。

「こんなに おいしい ご
はんは、ぼく、生れて
はじめてだよ。」

と、ひさしさんが いった
ので、にいさんたちは 声を たてて わらいました。みんな
なも ほんとうに おいしいと 思いました。

よく 晴れた 空の 下に、まっさおな 海が ひろがっ
て いました。すずしい 風が、海の方から そよそよと



ふいて きました。おきの 島の そばを、白い ほを は
った 船が しずかに 通って いました。

「キャンプの 生活は、ずいぶん かんたんですね。」

「大むかしの 人たちは、こんな 暮らし方を して いた
のでしょうか。」

などと 話を して いると、にいさんが、

「おもしろい お話を して あげよう。はなれ小島で、た
った ひどりで くらした 人の お話だがね。」

と いました。

みんなは 大喜びで 手を たたきました。おきの 島を
ながめながら お話を 聞きました。

(三) はなれ小島の 人

むかし、ある はなれ小島に、
ひとりの わか者が 流れつき
ました。

この わか者が、今から お
話を する ロビンソン・クルーソーです。

クルーソーは、小さい 時から、世界の
国々を まわって みたいと 思って いました。
生れた 国の イギリスを はなれて、方々の



国へ いきました。が、アメリカから アフリカに わたる
時、海の上で あらしに あいました。船の 人たちは
ボートで こぎだしましたが、みんな 大波に のまれて
しまって、この 小島に たどりついたのは、クルーソーと
一匹きの 犬だけでした。

海岸に はいあがった クルーソーは、そこに はえて
いる 木に のぼって、ねむりました。いつ、どこから、け
ものが 出て くるか わからないからです。

よく朝になると、あらしは おさまって 空は 青く
すんで いました。クルーソーの のって きた 船は、さ
んざんに こわれて、海岸に 近い いわの 上に うちあ

げられて いました。

クルーソーは さっそく およいで きました。船は、
すっかり 水びたしに なって いましたが、少しばかりの
食物を 手に 入れる ことが できました。てっぽうや
だいの どうぐなども みつかりました。

いつ、この 島から すくいだされるか わからないので、
どんな 品物でも 集めて おきたいと 思いました。船の
中には お金も ありましたが、それよりも、一本の くぎ
の ほうが ありがたく 思われました。毎日、船の 中に
ある 品物を 島に 運びました。

この 仕事は、つぎの あらしが きて、船が 流される
まで つづきました。

ある 日、クルーソーは 犬を つれて、この 島で 一
ばん 高い 山に のぼりました。遠くに 小さな 島が
見えるだけで、見わたす かぎり 海ばかりでした。島には
たくさん 木が はえて いましたが、だれも 住んで い
ない ことが わかりました。

クルーソーは、自分の 住む 家をつくりたいと 思
いました。のみ水の ある 所、あまり はげしく 日の さ
さない 所、けものに おそわれない 所、それに、船が
通ったら いつでも それが 見える 所、——家を たて
る 場所を 考えて、島ぢゆうを さがしまわりました。

そして、ある かけの 下に、そんな 場所を みつけま
した。

クルーソーは、船から 運んで きた ほの きれで、が
けの 下に テントを はりました。前を 庭に して、庭
の まわりに 土を もったり、くいを 打ちこんだりして、
高い へいを ごしらえました。へいには わざと 入口を
つけないで、はしごで 自分だけ 出入り するようし
ました。人も、けものも、すぐには のりこえる ことが
できないように したのです。

大むかしの 人が したよう
に、テントの 後の かけに

あなを ほりました。深く ほ
った あなは、物おきにも 台
所にも なりました。あなの
かべには たなを 作り、てっ
ぱうなどを かける 所も 作
りました。

庭の 前には 木も うえま
した。

パンを やく ことも、さら
や つぼを 作る ことも 考
えだしました。けもののかわ



で 着る 物も 作りました。近くに 小さな まきばを
作って、やぎなども かいました。いる物は、なんでも く
ふうして 作りました。

たった ひとつ、どうしても つくれない ものが あり
ました。——なんだと 思いますか。

それは ことばです。クルーソーは だれとも 話の で
きない ことを、たまらなく さびしいと 思いました。

そこで、オームを みつけて きて ことばを 教えまし
た。オームは、教えられた ことばしか いえませんでした
が、それだけでも、どんなに、なぐさめられた ことでしたよ
う。クルーソーは、三十年も、こんな ぐらしを しました。

学 し ゆ う の 仕 方

一、 たんぼぼ
じぶんから すすんで 学しゆうを
したり、お手つたいを したりしましよ
う。

じぶんの 生かつと くらべて みた
り、学びかたを 考えたりして、くふう
しながら 学しゆうを しましよ
う。

(一) 朝の 道
この 文を 書いた 人は、いま、
なにを して いる ところですか。
あなたが 三年生に なって、学校
に いく とき、どんな きもちが
しましたか。
あなたも こんな 文を 書いて
みましよ
う。

(二) 麦畑
春の けしきが、どんなに かかれ
て いますか。
この 文で、おもしろいと 思った

のは。どこですか。
あなたも、お手つたいを した こ
とを 文に かきましよ
う。

あなたは この 文を よんで、こ
の けしきの えが かけますか。
たんぼぼ
あなたも、みんなで この しばい
を して みましよ
う。

この しばいを、ふつうの お話の
ように、お話を して みましよ
う。
どう すれば よく この しばい
ができるか、くふうを して やり
ましよ
う。

一の ばめんと 二の ばめんが
どう ちがって いるのか、わかりや
すく いて みましよ
う。
たんぼぼの 子どもは、どこに ど
んで いて、それから どう なる
のでしよ
う。

あなたが たんぼの 子どもも
あつたら どう しますか。

二、
子どもの 日」に、あなたは なにを
しましたか。

村の 生かつと、町の 生かつを
らべながら 学しゅうしましょう。

(一) ゆうびん

この 文は、いくつに、わかれて
いるでしょう。それぞれ、どんな
こゝ
とが、かいて、あるでしょう。
まさおさんは、なぜ、手紙を、か
いたでしょう。

ふうどうに、あて名を、かくの
なせ、ペンで、かいたのでしょう。

あなたも、手紙を、かきましょう。

あなたも、ゆうびん局に、いった

ときの、お話を、しましょう。

(二) 子どもの 日

まさおさんと、ゆたかさんの、なか
の、いい、ところを、かきだして、み

ましょう。

まさおさんの 町では、「子どもの
日」に、どんな ことを、したてし
う。

あなたも、「子どもの 日」の、お話
を、しましょう。

あなたも、「子どもの 日」の、歌
を、歌いましょう。

(三) ぞうの たび

ふつうの、文と、ちがって、いる
ところは、どんな ところでしょう。

なぜ、こんなに、書くのでしょう。

この、文で、おもしろい、ところを
書きだして、みましょう。

ぞうに、ついて、知って、いる、こ
とを、お話ししましょう。

ひとつ、ひとつの、ばめんを、えに
書いて、みましょう。

紙しばいに、して、みましょう。

三、

つゆの、ころ
あなたの、すんで、いる、ところと

くらべながら、読みましょう。

天気や、きものの、ことなどを、しら
べながら、学しゅうしましょう。

(一) 日記

つゆの、ころだと、いう、ことが、
どんな、ことで、わかりますか。

だれが、書いた、日記でしょう。

あなたも、日記を、書きましょう。

日記は、どんなに、書いたら、いい
でしょう。

あなたも、ことばと、どうさの、こ
とを、かんがえて、みましょう。

どうさだけの、しばいど、いうのは、
どんな、しばいでしょう。

(二) 天気よほう

この、文を、まとめて、お話が、で
きるように、しましょう。

まさおさんの、よく、気の、ついた

ところは、どこだと、思いますか。

あなたは、どんな、ところを、おも
しろいと、思いましたか。

この、文に、なぜ、「天気よほう」と
つけたのでしょう。

(三) 虫ぼし

どんな、ときに、虫ぼしを、しますか。
なぜ、虫ぼしを、するのでしょう。

きものや、その、ほかの、ことに

ついて、しらべたり、お話を、したり
しましょう。

この、文で、おもしろい、ところは
どこでしたか。

あなたも、虫ぼしの、ようすを、お
話したり、文に、書いたり、しましょう。

テント

家の、たて方や、人々の、くらしの
ことなどを、しらべたり、考えたり、し
ながら、学しゅうしましょう。

夏の、生かつを、お話したり、夏休み

にする、ことを、考えたり、しながら
学しゅうしましょう。

(一) テント

この、文を、みじかく、まとめて、

お話が できるように しましょう。
 あなたも、テントを みた ときの
 お話を しましょう。
 テントは どんなに して はるの
 か、しらべて みましょう。
 テントと、ふつうの 家の たて方
 とを くらべて、お話ししましょう。
 (二)
 キャンプを たずねて、
 キャンプと、いっのは、どんな こと
 を するのでしょう。
 にいさんたちは、キャンプの くら
 して、どんな ことに 気を つけて
 いたでしよう。
 キャンプは、どんな ところで し
 たら、いいでしよう。
 むかしの 人の くらしと、キャン
 プの くらしとを くらべて、みましょう。
 キャンプの くらしと、いまの くら
 らしとを くらべて、 みましょう。
 (三)
 はなれ小島の 人
 だれが、どこで、どんな くらしを

新しい ことば

18	17	16	15	14	13	12	10	9	8	7	6	5	4	ページ
はたらく	つば	かんむり	冷たい	おわかれ	ふら(せる)	まきちらす	まきふみ	と(いて)	こし	せなが	きり	どうぐ	きえ(かけた)	つぼみ
送り(だす)		わた毛	せのび	しんぼう	すま(して)	草とり	あせ	のど	まん中	目じるし	ふるしきづつみ	かたち	ふくら(んで)	げき
おおせい		やり	深く			(ひと)かぶ	おいし(そう)	かわく	手ぬぐい	小声	くわ畑			

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
わか葉	日のまるのはた	公会どう	えいが会	かしわもち	用事	まじめ	子どもの日	かかり	まい子	ペン	こいのぼり	やくそく	うなず(いて)	まく
かがやく			世界	さつそく	おみやげ	や車		手つづき	受けつ(ける)	インク	小包み	せっかく	さんねん	
シナリオ			てんじ会		ちまき		まどぐち		おとな	あて名	あて名			

したのか、まとめてお話を しましょう。
 クルソーが、お金が ほしいな
 いと 思ったのは なぜでしよう。
 クルソーが 家をつくるのに、
 くふうした ことを 書きだして みる
 でしょう。
 クルソーが、オームに ことばを
 教えて いる ところを 読んで、あ
 なたも ことばに ついて 考えて
 みましょう。
 考えた ことを 話しあひましよう。
 この お話を、いくつかに わけて、
 紙しばいに して みましょう。
 クルソーの お話は、もつと 長
 く つづきます。いつか 読んで みる
 でしょう。
 あなたは、夏休みに どんな 本を
 読みたいと 思いますか。
 国語に ついて、どんな 学しゅう
 を して みたいと 思いますか。

58 したて(る) もったいな(い) あさ
 お(った) くだん着 手おり
 59 じぶん ふだん着
 60 かんたん服 たけ ぬいこみ
 61 テント 大学生
 62 キャンプ 海岸
 63 しらせ(て) さしず
 64 しちゆう さしず したがって
 打ちこ(んだ)
 65 ふきたお(される) こまか(な)
 66 たちどま(る)
 68 牛肉 ごちそう 生活
 69 ござき もうふ せいどん
 平ら めくって
 70 ゆわえ(る) くい

71 ごみため えいせい はんごみ
 73 おき 島 ほ
 74 かんたん イギリス
 75 わか者 ポート こと
 76 あらし けもの 食べ物 てっぼう だいく
 品物
 77 かきり おそ(う) 場所
 78 かげ はしこ
 79 物おき 台所 たな
 80 オーム さら なくさ(める)

34 クーバン インド人 物売り
 デッキ いかり くさり
 すじ てすり
 すじ
 35 ひく(く) ごきげんよう か(して)
 37 足もと あふない
 38 ラジオ
 39 船員 あれる はしら
 ささえる
 40 スクリュー はず 同じ
 41 ストープ
 42 クレーン つるされ(た) つな
 43 つゆ どうき (…に) ついて
 日記
 44 しせい どちらゆう はなお
 45 コップ 両手 てるてるぼうず

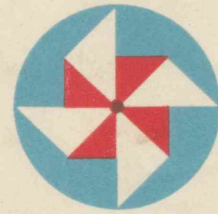
46 放送 あじさい さし水
 47 夕方 センチ かんさつ
 48 だいす
 近所
 49 校庭 こん気
 天気よほう やしろべえ
 50 あす 夕はん ぐあい
 51 空気 茶わん しかげ
 52 塩 たわら かいめん
 53 くふう (…に) にくい つりあ(わせて)
 54 せんだつて 工作 なんと
 55 はし(に) ゆうべ
 56 虫ぼし かび しょうのう
 古着屋 こうり トラंक
 57 ベンジン アイロン フラン
 きれ

後 (78)	活 (68)	庭 (48)	員 (39)	顔 (27)	聞 (16)	見 (5)
台 (79)	平 (69)	姉 (51)	細 (39)	世 (30)	着 (19)	持 (6)
	米 (70)	工 (54)	絵 (41)	界 (30)	楽 (21)	出 (6)
	器 (71)	服 (57)	場 (42)	公 (30)	買 (22)	芽 (6)
	島 (73)	帰 (61)	記 (43)	物 (33)	包 (22)	晴 (7)
	者 (74)	打 (64)	雨 (43)	売 (33)	局 (24)	急 (9)
	犬 (75)	注 (65)	両 (45)	汽 (34)	受 (24)	残 (12)
	品 (76)	意 (65)	妹 (45)	動 (35)	弟 (26)	葉 (13)
	運 (76)	開 (68)	金 (45)	来 (35)	喜 (26)	間 (15)
	住 (77)	牛 (68)	放 (46)	電 (37)	起 (27)	深 (15)

本書の中、とくに新しく新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

河野 鷹 思	そう て い	関 合 正 明	さ し 絵	た ん ぼ ぼ	栗 原 一 登
		浜 野 正 義		ぞ う の た び	栗 原 一 登
		赤 榎 末 吉			

小国 817		新 国 語 三 年 上	
		た ん ぼ ぼ	
APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE SEP. 14, 1950)		昭和二十五年九月十四日 印刷 昭和二十五年九月十八日 発行	
発 行 所	著 者	定 価	四 十 円 五 十 銭
東京都品川区東大崎一丁目五三二番地	垣 内 松 三		
光村図書出版株式会社	八 木 橋 雄 次 郎		
	東 京 都 品 川 区 東 大 崎 一 丁 目 五 三 二 番 地		
	光村図書出版株式会社		
	代 表 者 大 江 恒 吉		
	東 京 都 品 川 区 東 大 崎 一 丁 目 五 三 二 番 地		
	株 式 会 社 光 村 原 色 版 印 刷 所		
	代 表 者 光 村 利 之		



3
上

なまろ

広島大学図書

0130449802



書出版株式会社

文庫
50
802